

域研究学会がそろって「地域研究学会」となることは、現状では考えられないだろうと思います。

2000 年から 3 年ほど続いたコロナ禍では、国際人流が途絶して、フィールドワークを基盤とする地域研究には、いろいろな困難が生じました。その中で、研究の DX（デジタルトランスフォーメーション）を推進する傾向も強まり、デジタル化、サイバー空間の広がりをも対象とする研究が生まれてきました。それ以前から進んでいたデジタル・ヒューマニティーズの強化も、地域における SNS の分析などの新分野も出てきて、今後に期待が持てます。

地域研究は、地域の「固有性」を追究することを課題としていくべきだろうと思います。グローバル化で地域差が低減するという考え方もありますが、そもそもグローバル化は不均衡なプロセスですから、グローバル化による均一化の面があるとしても、グローバル化の地域差にも目配りが必要です。

総じて言えば、「平和」を希求する学知としての地域研究を考えるならば、その課題はまだまだ続きます。皆さまには、地域研究をさらに発展させ、人類の危機を乗り越えるブレークスルーをもたらすために尽力を続けていただきたいと思います。研究者に「定年」はありませんので、私も力のある限り、知的生産を続けていきたいと思っています。

本日は、ご静聴どうもありがとうございました。

***** 質疑応答 *****

司会（黒田彩加）：小杉先生、貴重なお話を数多く聞かせていただき、ありがとうございました。それでは、質問をお受けしたいと思います。

米田優作（立命館大学）：地域自体がグローバル化しているという中で、研究対象次第では、中東地域研究という特定の国や地域の枠組みだけではなくて、それを超えたグローバル・イスラーム地域研究のようなものも構想できると思われませんか。

小杉：そのグローバル・イスラーム地域研究は、どこにグローバルがかかっているのでしょうか。

米田：私が想定していたのは、例えば「抵抗の枢軸」やイスラーム解放党のような主体です。そのような主体自体が、グローバルな領域で活動を展開しているような状態です。

小杉：イスラーム地域研究という言葉自体に、そもそも越境的研究や広域比較ということが埋め込まれていますから、それを超えてさらにグローバルということはないと思います。すでにグローバルという面は含まれているのではないのでしょうか。

米田：イスラーム地域研究自体にグローバルな意味が内包されているということですね。

小杉：そういうことになりますね。イスラーム地域研究とは何かという定義は色々考えられますけれども、イスラーム世界を構成している諸地域というのがあり、イスラームという要素が非常に強いので、それを地域横断的に見るということです。

さきほど申し上げたように、イスラーム地域研究の対象は、〔単なる〕地域ではなくてメタ地域

なんですね。地域研究の地域とは、地球社会と国民国家の間に設定されていて、その中に地域研究の学会の名称にも入っている、中央アジアとか北東アジアとか、いわゆる「冠」付きの地域研究の対象があります。そして、その上にあるものがメタ地域です。イスラーム地域研究をメタ地域研究として見れば、当然のことながら、グローバルな要素を強く持たざるをえません。だからこそ逆にグローバルなイスラーム地域研究というのは、ちょっと屋上屋を架しているという印象です。

司会：私からも質問させていただきます。デジタル化が進んで、AIの台頭が著しい時代となっています。一昔前は、アラビア語の文献を読むということは一種の職人芸でしたが、今はAIが台頭して、翻訳家の役割がどんどん少なくなっていくのではないかという議論も出てきています。私自身は、それでも原典を読む仕事の重要性自体は変わらないというか、かえってどういう文献を読むかという選択そのものや、文献を読む上での勘所のような部分で、原典読みとしての地域研究者の役割はまだまだ残っているのではないかと考えています。先生はこうした事態をどう見ていらっしゃるでしょうか。

小杉：職人芸とおっしゃいましたが、まさにそこがポイントではないでしょうか。やはり、インターネットが広がって、Wikipediaのようなものが発展して、今のような情報化社会から情報過多社会のようになってきた時に、プロとアマチュアの境目が薄れていくという問題があるだろうと思います。ただ、例えばAIの翻訳だとか、人工的な翻訳ソフトをいろいろいじってみたところと言うと、いまいち水準がまだ足りないと思います。

とはいえ、AIの水準はどんどん良くなっていきます。良くなっていきますけども、基本的にAI自体は、既存のテキストの解析と一般化で成り立っているようです。私たちの仕事というのは、その元のテキストを作ることです。それをどんどん出していくと、AIの方もそれを読んで追いついてくるかもしれませんが、やはり限界があるんじゃないかと思います。限界がある最大の理由は、それがテキストだということなんです。自然言語というのは、テキストで伝わる部分は3割ぐらいとか言われています。残りの7割は、ニュアンスや文脈、それから音のトーンとかですよ。フィールドをやって初めてわかる言葉のニュアンスというのはやはりあるわけです。やはり地域研究者は、テキストだけではわからないような言語の幅というものを取り込んだ上で、テキストを解析していく。これが職人技なので、それはさっき言いましたように、それがどんどん続けて蓄積されていかなければ、AIの方だって進歩しようがないわけですから、そういう意味では、研究者の仕事はなくなるだろうと思いますね。

ただ、確かにAIの発展速度の問題はあります。プロとアマチュアの差が縮むという問題は一貫してあると思います。その一方で、最初インターネットが始まった時に皆が恐れたのは、サイバー空間が英語一色になってしまうのではないかということでした。英語帝国主義が世界を支配しそうだという議論がありましたが、実際にわかったのは、一定程度話者がいるところは独自の言語空間を作ることです。だから日本でも、サイバー空間上の日本語のシェアは世界人口における日本語話者のシェアより大きくなっています。サイバー空間のアラビア語を見ていると、情報量が非常に拡大していて、しかも、その中で古典が急速に普及してきています。アラビア語の実態レベルでも、古典を取り込んだ現代語というものが展開しています。

古典的なアラビア語は、AIがネット上でテキスト化されている既存の知識をベースにしているという点から考えると、まだAIにとって得意分野ではないと思います。ですから、現地語文献を

しっかり読む人の力はとても大事ですし、その部分の重要性和需要は、少なくとも 30 年ぐらいの
スパンではなくならないと思います。

山本健介 (静岡県立大学) : お若い時は、文学に非常に興味をお持ちだったと思うのですが、なぜ、
途中でおやめになったのですか。

小杉 : 最初に小説に興味を持ったのは、私自身が日本の小説が好きだったのと、アラビア語を教
わった奴田原先生が小説を研究なさっていたからです。今でも、アラブ文学は好きで読みますが、
研究対象とはしていません。それは、エジプトに留学して、アラビア語で「文学」とは何よりも詩
のことだとわかり、小説が西洋起源の新しい文学形態だと知ったため、アラブ世界を理解する上で
輸入の文学ジャンルを対象にするより、もっと固有の文化を探究すべきではないかと思ったからで
す。日本でも、作家が国民の時代に近代的な自我を表現する、読者がそれを学ぶ文学形態として小
説が入ってきたわけですし、私自身、小説をそのような人生を学ぶものだと思っていました。とこ
ろが、日本でも 1970 年代ぐらいを境に小説が消費物ないしはエンタメの一部となってきましたの
で、そのことも研究対象を変えた背景にあるように思います。

中西萌 (京都大学) : 先生の研究史において、一番の転換期はいつだったと思われますか。

小杉 : 2 つあると思います。1 つは、「地域研究って行ってなんぼの世界だよ」という言い方があ
るように、地域研究は現地に行かないと始まりません。しかし、私がエジプトに留学した頃は日本
から外国に出かけるのは自由ではありませんでした。外貨の規制もありました。そこからジャンボ
ジェット機が就航して、国際的な人流が拡大し始めました。それが 80 年代から 90 年代にいつそ
う様変わりします。格安切符も出てきて、21 世紀になると、誰でも現地に行けるようになりました。
そのインパクトは大きくて、普通の人でもどんどん現地に触れるようになりました。さっき挙げ
た小田実さんの『なんでも見てやろう』に感激したのは、あの時代は外国に行くことすら自由で
はなかった、招待されないと現地に行けないという時代背景があったからです。

現地との距離が物理的ないしは経済的に近づくと、現地に行くだけでは価値が出ないので、単
なる物見遊山でない、フィールドワークができるとはどういうことかという問題が出てくるようにな
りました。

それと同時に、先程も少しお話ししましたが、1988 年の「イスラームの都市性」プロジェクト
以降、21 世紀に向かって、大きな研究資金が取れるようになってきました。私が院生さんによく
言っていたのは、地域研究をする上では資金があった方がいいということです。現地に行かないと
調査ができませんから、図書館にあるけれど誰もまだ使っていない本を発掘して、しっかり読み込
んだら面白い研究ができましたということとは次元が違ってきます。少なくとも、現地に出かける
資金は必要です。しかし、行くだけだったら普通の人でもいくらでも行けるという状態が生じてい
ましたから、今から思うと、それは地域研究にとって非常に大きな転換期だったと思います。

もう 1 つの大きな転換期は、大学院の制度化ということです。1970 年代ぐらいまでの肌感覚で
言うと、私は外国語大学にいましたから、特にそうなんだろうと思いますが、語学の専門家は大学
院なんか行かないという考え方が普通でした。

語学はできてなんぼの世界なので、小理屈を覚えて理論がどうのと言っても始まらない、という

感じがありました。ところが今は、博士号がないと就職できないような仕事がたくさんあります。日本全体が1990年以降に大学院を強化したため、世界的にもそうですが、学位が研究職の「運転免許証」になりました。

その時代から、たくさんの大学院ができました。ASAFASもそうですけど、大学院教育を競う中で、学部を出てから研究をする、知的生産をすること自体が制度化されて、研究の方法や研究者になる道筋もだんだん整備されてきました。

私はある意味で、それは縛りだと思います。若い皆さんにとって、その制度に乗らなければいけないという縛りです。ただ、私の青年時代はそういうのが何もない時代ですから、好き勝手にやれたという面がある一方で、留学すれば成功するというものでもありませんでした。当時の感じだと、留学したけれども、うまくいかないということも多くありました。今は、現地に行くにあたって大学院が手厚くサポートしますし、大事故が起こったり、それこそ政変が起こって現地から帰れないような時には、教員が助けに行くための保険もかけています。そういうことも含めて、非常に制度化がなされています。逆に言うと、今の若い皆さんは、そういう制度の恩恵も受けているけれども、制度の仕組みをよく理解して研究しなければいけないという縛りもあります。私たちが若くて大学院の制度化も進んでなかった時代には、面白ければいいんだ、自分たちは面白いと思うからやっているんだという主張がよくなされていましたが、今はそれだけでは立ちゆかないでしょう。

もっと劇的な変化の話をお聞きになりたかったのかもしれませんが、今申し上げた2つは、どちらも少し長いスパンで徐々に動いてきたことで、劇的な変化ではありません。今になって振り返ってみると、40年くらいの間に大きな変化が起こったと、あらためて感じます。

米田：小杉先生はこれまでたくさん書いてこられた中で、どの程度の情報の確度があったら書くということに移られてきたんでしょうか。あるいは締切ごとに、ご自身の中で期限を設けて、それまでに書いたものを出すというふうにやってこられたのでしょうか。

小杉：難しい質問だと思いますが、2つの面があります。1つは、分析しきった、納得しきったということは、研究では容易に起こらないです。だから、何かを書こうと思った時は、今回はここまでわかったからそれを発表しよう、その先は次の論文でもっと深めていこうと考えるのが、合理的なスタンスだと思います。研究が未完成だ、不十分だという気持ちを重視しすぎると、発表しにくくなりますね。ただ、研究には、人がやらないことを率先してやっていくから新しい発見があるという面もあります。そうであれば、自分自身が、これではちょっと足りない、もうちょっと深いところがあるはずだと思う一方で、この問題について日本で一番の専門家であるはずの自分が今のところこうだと言っているんだから、それには誰からも文句は出ないはずというぐらいの確信感が必要だと思います。一歩踏み外すと不遜なことになってしまいましたが、客観的に考えてそうだという思いが持てるようにしていくということも、必要ではないでしょうか。

井上堅斗（立命館大学）：大学院生や若い研究者に、一番大切にしてほしいこと、日々心がけてほしいことはなんですか。また、先生の53年間の研究史の中で、様々な出会いがあったと思うのですが、その中でもっとも印象に残っている言葉はなんですか。

小杉：若い皆さんに私が常々お願いしているのは、大きな成功を狙うな、小さな成功を積み重ねよ

う、ということです。例えば、学会誌に論文を投稿すると、査読者から修正を要求されたり、リジェクトされたりする訳ですが、たいていの人には、掲載されたら成功という発想を持ちがちです。そうすると、掲載されないときは失敗ということになります。そういう数え方をすると負けが続きます。成功を狙うにしてもリスクが高くなります。研究に限らず、人生というのは小さい成功を積み重ねていくことが大事です。ですから、論文は投稿できたこと自体が成功と考えるんです。それで査読者から、論文のここがおかしいから修正してもう一回再投稿すると言われることがあります。査読者が厳しいと、投稿者の心が折れるようなきついことが書いてあるかもしれませんが、直せばいいと言われたのですから、それは成功の一種でしょう。

それで、最後のところまで行って査読に通らなかったとします。その時になって、初めて失敗だったということになります。しかし、いくつもの段階で成功を積み重ねた上での不採用ですから、そう悪くはありません。途中でいろいろ成功したので、次は、採用をめざせばいいのです。ということで、何をしたら成功なのかは小刻みに小さく規定して、少しずつ成功してそれを喜んでいく、それが大きな成功につながると思います。大きな成功というのは、私の考えでは、小さい成功が雪だるま式に大きくなったものです。小さい成功が失敗より1つでも多ければそれでいいんです。やはり研究でも人生でも、自分を肯定して進むということが大切です。肯定する秘訣は、やはり成功することにあると思いますが、成功を何と定義するかというその戦略戦術のところから、成功への道は始まるのです。

もうひとつの質問については、今日私は多くの先生方の名前を挙げたように見えますけども、それはごく一部で、かつ今日のお話を説明する上で名前を挙げる必要があった人たちです。特に外国の先生方で、私がお世話になった先生方はもっとたくさんいらっしゃいます。

それはさておき、そうした先生方の言葉の中で印象的なのは、長いこと共同研究をやっていたユースフ・イービシュ先生の言葉です。イービシュ先生はダマスカス生まれで、もともとはクルド系のアラブ化したアラブ人です。先生は、古典にも現代の文献にも通じた本当に素晴らしい学者だったのですが、彼がよく言っていたのは、「起こればよし、起こらなければもっとよし」ということです。

大学受験に例えると、難易度の高い第一志望の大学があつて、そして、俗に言う滑り止めの大学も受験するとします。それで、希望のところに受からなかったとします。イービシュ先生の考え方では、受からなくてよかったじゃないか、起こらないことは起こらないだけの理由があるから、起こらない方がいいんだということです。第2志望の大学の方が自分に合っているってことはあるわけです。自分が願っていることが、自分にとって一番いいこととは限らないですよ、願っているだけです。だから、普通はみんな、起こったら「よかった」、起こらなかったら「がっかりだ」と言いますが、イービシュ先生は、そういうふうに解釈しないのです。起こったらいいけども、起こらなければもっとよし。願っていないことが実はもっとよい道かもしれない、と考えた方が人生はいいんだというのが、20世紀前半の中東の動乱期に酸いも甘いも経験しつくした先生の言葉でした。

先程、レバノン内戦の時にバイルートに行っていた話をしましたが、後になってイービシュ先生に、あの頃どうなさっていたか聞いたことがあります。そうすると、ある日流れ弾が当たって身体を貫通して、彼はバイルート・アメリカン大学の教授でしたので、アメリカン大学の附属病院に運ばれたものの、もう患者で満杯で、病院の外の木の下に一夜寝かされていたのだそうです。そういう厳しい人生の経験をしている人が、「起こればよし、起こらなければもっとよし」なんだと、そう思って

生きるのがいいっておっしゃっていたのです。願ったことは起こるのがいいとだけ思って生きていると、起こらなかった時すごく辛いですね。でも、起こらなかったときは、それはそれでいいことがあるからそうになっているんだと納得しておくというのは、人生の達人の生き方だと思います。

実はイービシュ先生は、昔のシリアの人名辞典(アラビア語の題名は *Man Huwa fī Sūriyā*)で、お父様がシリア最大の地主として名前が出てくるクルドの名家のご出身なのです。ところが、アメリカに留学している間に革命が起きて、土地が全部没収されてしまいました。先生はハーバードで博士号を取る前の最後の2年間は長距離トラックの運転手のアルバイトをしてお金を工面していたということでした。

ユースフ・イービシュ先生のユースフというお名前は、エジプトのムハンマド・アリー王朝(共和革命で1953年に終焉)の一族で、親しかったユースフ王子の名前をもらったのだそうです。そういう方が革命で土地も全部失って、厳しい境遇を経て大学教授になって、本当にもう中東の歴史そのものが体に詰まっているじゃないかと思える方でしたが、そういう人がおっしゃる言葉です。こういうことが起こってほしいなという時に、起こったらうれしいというだけでは、人生の荒波に耐えられない。一枚腰ではなく、二枚腰で粘り強く生きる生き方が「起こればよし、起こらなければもっとよし」ということです。これはすごいですよ。

司会: 研究に対してだけでなく人生そのものに対して、より広い視野から、これから中東・イスラーム研究を支える若い世代の皆さんに向けたメッセージをいただきました。私自身も、大いに励まされました。非常に実り多い質疑応答の機会となったと思います。先生、本日は素晴らしいご講演をどうもありがとうございました。

【参考文献】

- アリソン, グレアム T 1977『決定の本質: キューバ・ミサイル危機の分析』宮里政玄(訳)中央公論社.
板垣雄三(編)・松本重治(監修) 1978『中東ハンドブック』講談社.
板垣雄三(編)・永井道雄(監修) 1992『新・中東ハンドブック』講談社.
イドリース, ユースフ 1978「ファラハートの共和国」加納吾朗(訳)『新日本文学』33(3), 16-30.
イブン・イスハーク 2010-2012『預言者ムハンマド伝(1~4)』イブン・ヒシャーム(編注)・後藤明・
医王秀行・高田康一・高野太輔(訳) 岩波書店.
岩波書店辞典編集部 2013『岩波世界人名大辞典』岩波書店.
梅棹忠夫 1969『知的生産の技術』岩波新書.
ガーズィー・ビン・ムハンマド王子 2021『現代人のためのイスラーム入門: クルアーンからその
真髄を解き明かす十二章』小杉泰・池端路子(訳) 中央公論新社.
片倉もとこ・加賀谷寛・中村光男・山内昌之・小杉泰・内藤正典(編著) 1987『現代イスラム小事典』
エッソ石油株式会社広報部.
片倉もとこ・後藤明・中村光男・加賀谷寛・内藤正典(編) 2002『イスラーム世界事典』明石書店.
クリストファー, ジョン 1972「最終兵器」小杉泰(訳)『SF マガジン』167号, 52-57.
加納吾朗(小杉泰) 1982『イスラームの挑戦: 次に倒れるのはサウジ…なのか?』講談社.
小杉泰 1984「イスラームの『復興』: 概念と構造」『国際問題』293, 17-31.
—— 1986a「現代イスラーム思想における主権と国家: スンニー派・シーア派の政治理念をめぐって」『日本中東学会年報』1, 1-33.

- 1986b 「現代イスラームにおける宗教勢力と政治的対立：カイロにおけるアズハル＝フセイン複合体とサラフィー主義」『国立民族学博物館研究報告』10(4), 959-1000.
- (編訳) 1992 『イスラームの革命と国家：現代アラブ・シーア派の政治思想』国際大学中東研究所.
- (編) 1993 『イスラーム復興主義運動の諸組織と実態』日本国際問題研究所.
- 1994a 『現代中東とイスラーム政治』昭和堂.
- 1994b 『イスラームとは何か：その宗教・社会・文化』講談社 (現代新書).
- 1994c 「現代におけるイスラーム復興の眺望」『国際問題』411, 2-17.
- 1994d 「現代パレスチナにおけるイスラーム運動」『現代の中東』17, 2-26.
- 1994e 「イスラームにおける啓典解釈学の分類区分：タフスィール研究序説」『東洋学報』76(1・2), 85-111.
- 1998a 『イスラーム世界』(21世紀の世界政治5) 筑摩書房海.
- 1998b 「構造化する中東の危機：和平プロセス・民主化・イスラーム復興」『国際問題』462, 2-14.
- 2002 『ムハンマド：イスラームの源流をたずねて』山川出版社.
- (監修) 2003 *CD-ROM Al-Manar 1898-1935* (Kyoto: COE-ASAFAS, Kyoto University), 京都大学 COE プロジェクト [アラビア語『マナール』誌・CD-ROM 復刻版].
- 2006 『イスラーム帝国のジハード』(興亡の世界史06) 講談社.
- 2009 『「クルアーン」：語りかけるイスラーム』岩波書店.
- 2011 『イスラーム 文明と国家の形成』(諸文明の起源4) 京都大学学術出版会.
- (編訳・解説) 2019 『ムハンマドのことば：ハディース』岩波書店.
- 小杉泰・岡本多平・竹田敏之 2008 『イスラーム世界研究のための現代アラビア語マニュアル 2008』京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科連環地域論講座 (イスラーム世界論)・研究科附属イスラーム地域研究センター (KIAS)・若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP).
- 2009 「日本におけるアラビア語教科書と文法用語：教育戦略と基本用語の邦訳をめぐって」『イスラーム世界研究』2(2), 63-95.
- 小杉泰・岡本多平・竹田敏之・ハシャン・アンマール 2018 『中東地域研究のためのアラビア語：実践文法と用例』京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科グローバル地域研究専攻, 京都大学イスラーム地域研究センター, ハダリー・イスラーム文明研究センター.
- 小杉泰・「グローバル化時代に対応する 21 世紀型イスラーム学の構築」研究チーム 2017 「21 世紀型イスラーム学の拡充と活用へ向けて：5 項目の戦略的提言」『イスラーム世界研究』10, 124-130.
- 小杉泰・林佳世子・赤堀雅幸・保坂修司 2000 「デジタル情報化時代の研究作法」『地域研究スペクトラム』(4), 2-28.
- 小松久男・小杉泰 (編) 2003 『現代イスラーム思想と政治運動』(イスラーム地域研究叢書2) 東京大学出版会.
- 小杉泰・長岡慎介 2010 『イスラーム銀行：金融と国際経済』(イスラームを知る12) 山川出版社.
- 小杉泰・林佳世子・東長靖 (編) 2008 『イスラーム世界研究マニュアル』名古屋大学出版会.

- サイード, エドワード 1993『オリエンタリズム (上・下)』今沢紀子(訳)・板垣雄三・杉田英明(監修)平凡社.
- 佐藤孝宏・和田泰三・杉原薫・峯陽一(編) 2012『生存基盤指数: 人間開発指数を超えて』(講座・生存基盤論5) 京都大学学術出版会.
- サドル, ムハンマド・バーキルッ 1993『イスラーム経済論』黒田壽郎(訳) 未知谷.
- 末近浩太 2005『現代シリアの国家変容とイスラーム』ナカニシヤ出版.
- スクリプナー思想史大事典翻訳編集委員会 2016『スクリプナー思想史大事典』丸善出版(全10巻).
- ディック, フィリップ・K 1969『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』浅倉久志(訳) 早川書房.
- ナイト, デーモン 1972『男と女』小杉泰(訳)『SFマガジン』13(5), 73-77.
- 長岡慎介 2011『現代イスラーム金融論』名古屋大学出版会.
- バラズリー 2012-2014『諸国征服史(1~3)』花田宇秋(訳) 岩波書店.
- バンナー, ハサン 2015-2016『ムスリム同胞団の思想: ハサン・バンナー論考集 (上・下)』北澤義之・高岡豊・横田貴之(編訳) 岩波書店.
- フーコー, ミシェル 1977『監獄の誕生: 監視と処罰』田村俣(訳) 新潮社.
- 牟田口義郎 1965『石油に浮かぶ国: クウェートの歴史と現実』中公新書.
- 三浦徹・東長靖・黒木英充(編) 1995『イスラーム研究ハンドブック』(講座イスラーム世界・別巻) 栄光教育文化研究所.
- 三留理男 2012『目撃者』毎日新聞社.
- 吉澤誠一郎(監修)・石川博樹・太田淳・太田信宏・小笠原弘幸・宮宅潔・四日市康博(編) 2022『論点・東洋史学: アジア・アフリカへの問い 158』ミネルヴァ書房.
- Kosugi, Yasushi. 1991. "Restructuring Islamic Political Theories: Basic Concepts in a Contemporary Framework," in Toshio Kuroda and R. I. Lawless (eds.), *Nature of the Islamic Community*, Keiso Shobo, 37-70.
- . 2022. "Synergy of Knowledge in the Formation of Islamic Jurisprudence: The Five Categories of Legal Rulings (Ahkam) from 'Abd al-Jabbar to al-Ghazali," in Khairudin Aljunied (ed.), *Knowledge, Tradition and Civilization: Essays in Honour of Professor Osma Bakar*, Oldham: Beacon Books and Media, 127-144.
- Kosugi, Yasushi, Yūsuf Ḥusayn Ībish, and Yūsuf Qazmā Khūrī (eds.). 1998. *Fihris Majalla al-Manār 1898-1935*. Beirut: Turāth; Tokyo: Islamic Area Studies Project [『マナール』誌 1898-1935 年索引].
- Kosugi, Yasushi and Yūsuf Ībish (ed.). 2005. *Turāth al-Fikr al-Siyāsī al-Islāmī*. Beirut: Turāth; Kyoto: 21st Century COE of Integrated Area Studies, Kyoto University [アラビア語『イスラーム政治思想の遺産』].